

和歌山大学教育学部附属小学校

らいふ LIVE 倉レATOR つくりえいたー

NO.20

2004. 6. 4

研究広報誌

CONTENTS

「意味と内容」が
ひろがる学びの創造
まなさしの共有によって

●授業研究週間のご案内	1
●学習紹介 「1Cふれあいタイ！」(1Cみらい)	2
●学習紹介 「カエルのうたがきこえてくるよ」(2C音楽)	3
●学習紹介 「物語の世界へ発信！」(3C国語)	4
●学習紹介 「複式学級～国語科学習の重点ポイント～」(3・4F国語)	5
●学習紹介 「新しいわたし 新しい友達」(5C国語)	6
●学習紹介 「感動ある理科学習をめざして！」(理科専科)	7
●わたしの学校 HOT LINE 共同研究開発校 “教育”子どものための選択 副校長 北島健司	8

新設《授業研究週間》公開近づく！

(6月14日午後から18日まで)

教科学習の原点に立ち返る！～「意味と内容」がひろがる学びの創造～
～いま附属小が変わる！！～8教科・12研究授業の公開&研究協議会

6月	授業者	研究授業 I (13:40-14:25)	授業者	研究授業 II (14:35-15:20)
14 日 (月)		社会科 「住みよいくらしをささえる」 ～水はどこから～ 片桐 宏 (4年A組)		社会科 「いざ鎌倉!!」 田中いずみ (6年B組)
		図工科 「おきにいり あつめて」 竹中恵美子 (2年A組)		音楽科 (第1音楽室) 「エーデルワイス」 ～見る・聴く・愛する～ 江田 司 (6年C組)
15 日 (火)		算数科 「たしざん(1)」 池田 彦男 (1年A組)		算数科 「ようこそ レストラン4Bへ」 ～テーブルといすのマジック～ 梅本 優子 (4年B組)
		理科 「生きものたんけんたい」 ～むしむしワールド～ 中筋 美恵 (3年B組)		理科 「ヒトや動物の体」 不野 和哉 (6年A組)
18 日 (金)		国語科 「スイミー」 ～音と一緒に楽しく読もう～ 須佐 宏 (2年B組)		国語科 「つり橋わたれ！」 ～ファンタジーの世界～～ 竹光眞佐人 (3年C組)
		体育科 (運動場) 「バスケットボール」 石本 倫章 (5年B組)		家庭科 「食について考えよう！」 藤原ゆうこ (5年A組)

(15:30-17:00)各教科部協議会【指導助言者】

国語科：武西良和 (有功東小学校校長)

社会科：片桐清司 (前有功東小学校校長)

算数科：佐藤昌吾 (橋本市教委・指導主事)

理科：中原 徹 (松江小学校校長) 宮永健史 (和歌山大学)

音楽科：長田浩子 (貴志南小学校校長) 嶋田由美 (和歌山大学)

図工科：堀 憲子 (小倉小学校校長) 永守基樹 (和歌山大学)

家庭科：坂本記美子 (雄湊小学校校長)

体育科：三上滋樹 (今福小学校校長)

○事前申込みはございません。参加費（資料代）は無料です。

○駐車場は、正門（赤門）横から運動場へお願いします。

○18日には「複式授業研究会」（4授業・協議会）も併せて開催します。

みらいの学習

1C ふれあいタイ！

1年C組 担任 辻本 郁夫

「かかわり合う力を育むみらいの学習」をテーマに設定し、「かかわる」をキーワードとして学習をすることにしました。

子どもたちは「もの・こと・ひと」とかかわる中で自立への基礎を培っていくものです。その点から考えても具体的な活動を通して自然や社会とのかかわりを大事にしながら学習を展開するみらいの学習の重要性は抜きにすることはできません。本年度は、食・遊び・人それぞれに一生懸命にかかわろうとする子どもたちの姿を追い続けながら実践を行っていきます。

★★食にかかわり、食から学ぶ★★



ものとのかかわりということで栽培活動を取り入れていきたいと思います。主に野菜を栽培するいわゆる「食農体験」を考えてみました。少子化・核家族化で限られた体験しかできなくなってしまった子供たちに土と戯れ、育てた作物を収穫する喜びを味わ



わせると共に、栽培活動を通して生命の大切さや食の意義を実感させていたらどんなに素晴らしいかと思います。

★★遊びにかかわり、遊びから学ぶ★★

こととのかかわりとして「遊び」を考えてみました。遊びを子どもの自由な時間・空間とともに学習を組み立てていきます。この遊びを通して社会的なかかわりを培っていきたいと思います。子どもたちにとって、遊びは大変重要な位置を占めるものでしょう。自分の気に入った遊びをしている時の目の輝きは大人の目を楽しませてくれます。栽培活動で収穫できたものをどのようにするか考えること、季節の素材を使ってのアルバム作りを考えること等々、おしきせにならないように配慮しながら遊びを形作っていきたいと考えています。

★★人にかかわり、人から学ぶ★★

ひととのかかわりとして「しごと」を学習材に考えました。子どもたちの回りには多くの働く人々がいます。その中から自分たちのために苦労を顧みず働いてくれている人がいることに気づき、その人たちはどのような思いで仕事をしているのか捉えることに視点を当てた学習を行いたいと考えています。また、子どもの思いや願いを出発点に考えたとき、教師の支援だけでは充分に子どものニーズに応えることができない場合があります。そんな時活動の広がりや深まりにともない保護者の方や地域の方にゲストティーチャーとして授業に協力していただくことをも通して人とのつながりの大切さに気づかせたいです。

これら自然・遊び・ひととかかわることを通して、例えば好きになった。例えば楽しんだ。楽しいと言えるようになった。さらには優しい。いい人と思ったなど、子どもたちの思いを入れ込む気持ちが強くなる姿を期待します。



音楽科においての追究の対象は「音」です。「音」を感じ取り、「音」を楽しみ、「音」を愛するためには、『見る』『聞く』ことが必要であり、そのために、視覚的に聴覚的に鑑賞活動を充実していきたいと考えています。日常生活や音楽科の学習において、注意深く、比べながら『見る』『聞く』ことを中心課題として取り組んでいきます。

音楽そのものに興味をもってかかわらせることを通して、『見る』『聞く』力を身につけさせたいと考えています。音楽と積極的に、興味をもってかかわるためには、技能の習得も大切な要素です。のために、鍵盤ハーモニカによる演奏が比較的容易な「かっこう」「かえるのがっしょう」を教材とし、技能面の指導をおこないます。自分の力で演奏ができたという自信をもった子どもたちは、新しい曲とであったとき、「自分に演奏ができる曲なのだろうか」「どんな楽器をつかって演奏しているのだろうか」「素敵なおかげだから挑戦してみようか」というように、ただ、『見る』『聞く』ということだけではなく、自分とのかかわりで、『見る』『聞く』ことができるものと考えています。

また、注意深く比べながら、『見る』『聞く』ことを楽しむようになった子どもたちは、自然から聴こえてくる音と、音楽科で学習している音を連動させることもするでしょう。「かえるのがっしょう」を演奏することで、カエルの鳴き声に注目する子どもも生まれてくるでしょう。普段、カエルの鳴き声を楽しんでいる子どもが鳴き声の部分に着目し、絵譜で表現されているカエルの鳴き声のリズムと、CDから聴こえてくるリズムの違いにきづくという音楽的な内容の学習をすすめていくこともあるでしょう。日頃から朝の会で歌っている詩なども、「かえるのがっしょう」のリズムにのって歌ったり、速さやリズムを変えながら歌ったり、リズム楽器を加えたりと、内容が広がっていけば良いなと考えています。



日常生活においては、本校の自然に恵まれた環境を利用し、自然の音を味わわせたいと考えています。窓の外から聞こえてくる小鳥の囁き、木々や草花のささやき、そして、教室で飼育している小動物の鳴き声等、集中することで『聞く』ことができるこれらの音を味わわせていくこと。また、自然を味わうということは、目と耳で感じるということだけではなく、そのときの風や空気を体全体で感じるということです。天候や季節によって変化する自然、集中することでその違いに気づいていくことになるでしょう。

物語の世界へ発進！

国語科

—「比べて考えよう」「感じてみよう」そして「表現しよう」— 3C 担任 竹光真佐人

◎「比較」の有用性に着目して

物語文の理解は言うに及ばず「比較すること」を認識手段の一つとして色々な学習に取り入れています。そして比較を活用する場合、「どんな目的のために比較するか」「何のために比較するのか」等、目的意識をハッキリと持つて活用することや、「比較対象」についてや「比較効果」についても考え方を合わせて学習しています。



「比較の対象」においては、物語内の文章比較に留まることなく、「作品内比較」から、「作品対作品」というように「比較操作対象範囲」を広げ、同一作者の「作品群理解」(シリーズ物)や、多くの作者による「類似作品群理解」(特定の動物が登場する物語)にまでその範囲を広げていきたいと考えています。

これらの学習で、作品内容理解を中心にして「本の世界を広げる」ことを基本として、さらには「自分の考え方や思い」そして「言動を振り返る」という自分の生き方・考え方との比較をその目的範囲となりうるような高度な「思考操作」をも念頭において学習していきたいと考えています。

1. 「比べて考えよう」

○物語文の理解のために

物語文の学習で「比較」を考えた場合、「登場人物の言動やその変容を比較する」「様々な場面の情景を比較する」等、テーマや登場人物像を追求していく場合、作品内のいろいろな「比較操作」が有用だと考えています。また、その中で「つり橋われ」では「ふんだ…」や「ママーッ」等主人公や登場人物の言動を比較することで、その「行為」に対する「多義性」や「意味の二重性」をも理解させたいと考えています。すなわち「比較対象相互の関係」をより深く学習していく過程では登場人物の心情やその変容の比較がとても有効だと考えています。

○思考を練るために

「思考を練る」という観点から、自分の考え方を持つために自己の設定した「二つの観点」を相互比較することで自分の考え方を練り上げ、それらの比較結果を文章化することにも取り組んでいます。

また、それとは逆な観点として「一つの事実(事象)」をもとにして色々な角度から多様な考え方を持つ。という課題にも取り組んでいます。それは、言葉の理解で表面的かつ直接的な思考を避け、多様な思考の出来る子を育てていきたいと考えています。つまり、「多義性」や「意味の二重性」を理解させるのもその一つの方略として取り組んでいるのです。

2. 「感じよう」そして「表現しよう」

「比較操作効果の活用」と同時に「五感に関わる表現を大切にした文章(作品)理解」を考えていきたいと思っています。また、それと表裏一体をなす学習として「五感を駆使して文章化をはかる」ことも学習していきたいと思っています。この2つの学習を通して文章理解のさらなる深化と、感性豊かな文章表現能力の育成を図りたいと考えて取り組んでいます。

○物語のおもしろさを知るために

登場人物の言動は言うに及ばず「情景を理解する」ことは、作品全体にわたるテーマや作品内容を理解するための大切な学習要素の一つだと考えました。そこで、「五感を駆使した文章理解」に着目することにしました。「五感表現(五感に関わる表現)」に立ち止まり、その文章内容を自分なりに感じ取ることを大切に学習を進めたいと考えています。それは、単なる機械的な内容理解に終わってしまうのではなく、作品全体の理解に対する補助的な思考操作としてとても大切なことを考えたからです。

○発信するために

「五感に関わる表現を大切にした文章理解」と一対を成す学習として「五感を大切にした文章化」を考えました。文章から「五感表現」を理解する能力の大切さを考えるなら、その対面にある、子供達自身が自然や社会から「感覚器官」「心」を通して情報を受け取り、それを再び自分なりに発進するための「柔軟かつ繊細な感覚器(受容器)」(敏感かつ繊細な需要器官)作りと、その表現能力育成が大切ではないかと考えました。その取り組みの一つとして、まず手始めに「きつつきの商売」の学習を起点に「音や色(匂い)」について直接的かつ感覚的な表現能力の向上を図っていきたいと考えています。

また、思考結果を「自分の感じる色や匂いに当てはめて表現する」という「思考を色彩イメージに当てはめる」という2種類の知的の操作をも学習の目的に掲げました。そして、日常生活にも目を向け、子供達の生活全般からも自然や社会事象において「五感」を通して認識したことを文章化し表現する活動を数多く取り入れていきたいと考えています。

3・4年複式学級～国語科學習の重点ポイント～

担任 西村 充司

温かみのある感受性を指導者自らも態度で示していくことで

子どもたち相互に、発言者の積極性や勇気を認め、意見内容をその子のまなざしに寄り添って聞き入れていければと願います。そのためにも、うなずきと微笑みをもって受容し合い、発言しやすい教室の雰囲気をつくっていきたいです。

書くことを重視した学習を展開していくことで

子どもは、書くためにじっくりと主体的に考え、書くことで自分の考えを自分の言葉でまとめます。書いているからこそ自信を持って積極的に発言できるし、自分の思いと比較しながら仲間の意見を聞くことができます。仲間の考えを温かく受容しながら、さらに自分の考えを広げ、深めていけるし、新たな自分の考えと比較することにより、自分自身の変容にも気付くことができます。

指導者は、発言や表情の中では共有できなかったその子のまなざしにふれています。書き残していくことにより、それぞれの子どもの成長や変容を確かにとらえ、その子とともに分かち合え、喜びを共有できます。また、その子のまなざしに即しコメントが記せ、それぞれの子どもとの対話の空間を育むことができます。

「自分なりの言葉で表現する」を常に意識していくことで

自分の思いや考えを的確に表現できているか、こだわりを持って表していきます。そのため、安易に「同じです。」とくくなってしまはず、似た意見でも自分なりの表現を追究する構えを常に大切にしていきたいです。そのことにより、一人ひとり着実に表現力につけることができるし、少人数ではあっても、言葉や表現にこだわった磨き合いから、集団としてのより一層の深まりが期待できます。

自分たちの学びのスタイルを身につけていくことで

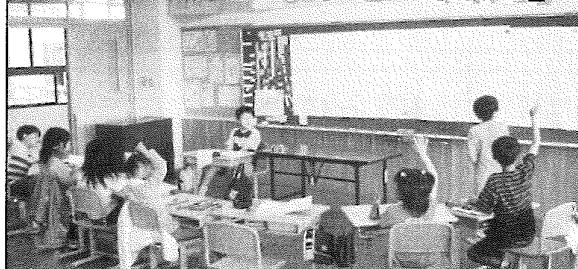
3年生・4年生それぞれに、学習課題にそった一人学びでの書き込みを重視し、それをもとに仲間の意見と比較しながら自分の考えを伝え合い、深め合います。また、主題にも関わるポイントでは、さらに自分の考えを書いて意見交流します。単元の終末など効果的と思われるところでは、それぞれの学年の学習成果を交流します。そんな自分たちの学習の流れを大事にしていきます。主体的に学習を進めていくとする意識や態度を学習者全員がもて、自分たちの学びのスタイルが身についてこそ、ガイド役の司会者も有効に機能し、間接指導も意義あるものとなります。

そして、そこでは、指導者の出のタイミングと発問がポイントになります。学習課題からそれていないか、意見交流が滞っていないか、学習に参加できていない子どもはいないか、より活発な磨き合いに発展しそうな発言が埋もれてしまっているか、子どもたちの発言内容や表情をみとり、16人の子どもたちとまなざしを共有することで、そのタイミングと投げかける言葉に意味をもたせていきたいです。

4年生:「三つのお願い」



3年生:「きつつきの商売」



司会と記録は日替わり交代です。4年生はガイド役が両方を、3年生は2人で分担して進めことが多いです。何をどう書き表すか、悩み工夫していますが…。

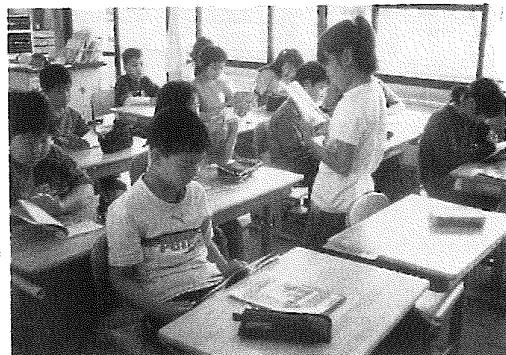
国語科

新しいわたし

新しい友達

5年C組担任 沖 香寿美

本校国語部では、昨年度から「比較を通して、楽しく読み味わい、伝え合う力を高める」ことをテーマとして取り組みを続けています。



読みの楽しさは、作品と作品、文と文、ことばとことばなどを比較することによって増すと考えています。比較することによって、共通点や相違点を見つけることができたり、表現の工夫を見出したりできます。また、一つの作品・文・ことばでは得られない情報を得ることができ、ものの見方、感じ方、考え方を確かにしてくれ、読みの楽しさを味わわせてくれます。

4月に取り組んだ実践を紹介します。

本単元では、教材「新しい友達」に出てくるクロッカスに着目しました。子どもたちは、「なぜ、クロッカスをあげたのだろう。」という疑問をもっていました。これを課題にし、授業を開きました。

ひろは、なぜクロッカスをあげたのか。

私だと思って大事にして
という気持ちが、ひろにはあったかもしれない。

手紙と手紙の間が空くようになった
ということは、心も離れたのかなあ。

クロッカスには意味があるのか。

クロッカスの花言葉
あなたを待っています。
私を信じてください。
あなたを心配しています。

クロッカスでなく
てもいいのに…

まりも大事な親友にもらった
クロッカスをいつまでも大切
に育てようと思ったので、「絶
対。絶対植えるからね。」と言
ったと思う。

クロッカスにひろの気持ちが
込められていることがわかつ
た。離れても、ずっと友達でい
たかったのだと思う。

ひろは、花言葉を知っていた
のかな。まりも知っていたの
かもしれない。だから、球根
を大事に育て、花を咲かせた
のだろう。



この後、既習の「白いぼうし」のなつみかん、「一つの花」のコスモス、「新しい友達」のクロッカスを比べました。物語を読む上で、重要な役割を果たす物を比較し、より深く読ませたかったからです。子どもから出された考えをまとめると、次のようになりました。

「白いぼうし」なつみかん
松井さんのやさしさや思いや
り。

「新しい友達」クロッカス
ひろとまりの友情のあか
し。

「一つの花」コスモス
強く元気に育ってほしいと
いう父の願い。

登場人物や場面の様子などの比較は、今まで行なってきました。今回のように、物に着目することは、子どもたちあまり経験がなかったようです。物を比較することによって、より味わい深く読めたことをうれしく思っています。

ともに語り合いませんか

共同研究開発校

- ◆粉河町立 粉河小学校 (松下 裕 校長)
- ◆橋本市立 西部小学校 (中迫伸次 校長)
- ◆野上町立 野上小学校 (竹内宏行 校長)
- ◆美里町立 下神野小学校 (津田修吾 校長)
- ◆美里町立 上神野小学校 (橋本由平 校長)
- ◆広川町立 広小学校 (福田正幸 校長)
- ◆川辺町立 川辺西小学校 (川越正博 校長)
- ◆龍神村立 甲斐の川小学校 (玉置 繢 校長)

- ◆田辺市立 田辺第一小学校 (中山真一 校長)
- ◆那智勝浦町立勝浦小学校 (中西克氏 校長)
- ◆和歌山市立 有功東小学校 (武西良和 校長)
- ◆和歌山市立 雜賀小学校 (奥野 順 校長)
- ◆和歌山市立 城北小学校 (山崎光弘 校長)
- ◆和歌山市立 四箇郷北小学校 (野田貞一 校長)
- ◆和歌山市立 広瀬小学校 (貴志節子 校長)

"教育" 子どもたちのための選択

副校長 北島 健司



「教育；大変な時代」（新堀通也著）が出来、教育界だけでなく社会に大きな反響を呼びました。平成8年6月のことです。私は、シリーズ「学校；大変な時代」・「教職；大変な時代」・「子育て；大変な時代」・「子ども；大変な時代」、と何度も読み返し、胸が高鳴ったのを今も覚えています。

それから8年。日本の教育は、どう改善されたのでしょうか。

残念ながら、著者の予測どおり、現在の教育界は、さらに危機的な大変な時代を迎えているように感じます。結果的に子どもが一番大変な時代を迎えているのです。

今、こういう時代だからこそ、子どもたちのための選択が必要になります。「子どもたちに何が必要か」

「私たちにできることは何か」の視点をもつことが大切ではないでしょうか。

「教育は人なり」と言われますが、私たち教師が、教育の原点に立ち返り、子ども理解の教育を推進することが大切だと考えます。

ずいぶん前になりますが、私は、授業後、大阪のある先生に、「あなたは、どのタイプの先生ですか?」と尋ねられたことがあります。子どもにとって、「無くてはならない先生?、いてもいなくてもいい先生?、いないほうがいい先生?」ということです。大変厳しい質問でした。

以後、「子どもは己の鏡」と自省するよう心がけました。

川は岸のために 流れるのではない
川のために 岸ができるのだ
子どもは 教師のために 生まれてきたのではない
子どものために 教師ができたのだ
子どもひとりひとりの 生き方の流れの
美しさ たくましさ おもしろさを認め
それに沿って 指導の岸を構築してくれる教師に
子どもは 魅力を感ずる

(作：東井義雄先生)

「子どもがあって教師があり、子どもがあって学校がある」ということを大切にしていきたいと思います。

授業研究の会には、短時間でも結構ですので、ぜひ附属小学校においていただき、私どもにご示唆をいただければと思います。お忙しいことと存じますが、よろしくお願ひいたします。

From Editors

「子どもの育ちで勝負できる教育」をめざして、日々、研究実践に取り組んでいます。ご意見・ご感想をお寄せください。されば幸いです。

和歌山大学教育学部附属小学校

〒640-8137 和歌山市吹上1丁目4番1号

TEL (073) 422-6105 FAX (073) 436-6470

URL <http://www.aes.wakayama-u.ac.jp>

E-mail fuzoku@center.wakayama-u.ac.jp